

石炭をすでに積み終えた。二等室のテーブルの辺りはとても静かで、電灯の光がはなやかなのも無駄である。今晩は、毎晩ここに集まるトランプ仲間もホテルに泊まって、船に残っているのは私一人だけだから。

五年前のことだったが、かねての望みがなくなって、西洋留学の官命を受け、このサイゴンの港まで来た頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、どれ一つとして新しくないものはなく、筆に任せて書き記した紀行文は、毎日幾千語となっただろうか。当時の新聞に載せられて、世間の人にもはやされたけれど、今になって思うと、幼稚な考え、身の程を顧みない放言、そうでなくても平凡な動・植・鉱物、さては風俗などまで珍しそうに書いたものを、心ある人はどう思っただろうか。帰国の途についた時日記を書こうと思っただけのノートも、今度はまだ白紙のままなのは、ドイツで勉強している間に、一種のニル―アドミラリの気質を養えたからだろうか、いやそうではない、これには別に訳がある。

東に帰る今の私は、たしかに西に航海した昔の私ではない。学問こそまだ満足しないところも多いが、この世のつらいことも知った。他人の心の当てにならないのと言うまでもなく、我とわが心まで変わりやすいことをも悟りえた。昨日の是が今日は非となる移ろいやすい私のその時々を感じを、文字にしたい誰に見せようというのか。これが日記のできない理由だろうか、いやそうではない、これには別に訳がある。

ああ、プリンデイジの港を出てから、はや二十日以上たってしまった。ふつうならば初対面の客にまでつきあって、旅の憂さを慰め合うのが船旅の習いなのに、軽い病気を口実に客室の内にはかりこもって同行の人々にも話すことが少ないのは、人の知らない悔恨に悩んでばかりいたからである。この悔恨は、旅の初めは、一片の雲のように私の心をかきくもらせて、スイスの山の景色も見せず、イタリアの古跡にも心を留めさせず、中頃は、世を厭いわが身をはかなんで、腸が一日に九転するほどのはげしい苦痛を私に味わわせ、今は、心の奥に凝り固まって小さな一つの影だけになったけれど、本を読む度に、なにかを見る度に、鏡に映る姿、声に応えるこだまのように、昔を偲ぶ尽きない思いを呼び起こして、何回となく私の心を苦しめる。ああ、どうしたらこの悔恨が消えるだろうか。もしほかの悔恨ならば、それを漢詩に詠じ和歌によんだ後は気持ちですがすがしくなるだろう。だがこの悔恨だけはあまりに深く私の心に刻みつけられたので、そんなことでは心が晴れることはあるまいと思っただけ、今晩は辺りに人もない、ボーイが来て電気のスイッチを切るにはまだ時間があるだろうから、どれ、そのあらましを文章に書いてみることにしよう。

私は幼い頃から厳しい家庭の教育を受けたお蔭で、父を早く失ってしまったが、学問が荒れ衰えることはなく、旧藩の学校にいた日も、東京に出て予備門に通っていた時も、大学法学部に入った後も、太田豊太郎という名はいつもクラスの初めに記されていたことに、ひとりっ子の私を頼りとして暮らす母の心は慰められただろう。十九の歳には学士号を受けて、大学ができてからそれまで例のない名誉だと人にも言われ、某省に勤めて、故郷の母を都に呼び迎え、楽しい生活を三年ほど送った頃、役所の上司の信任が格別だったので、洋行して一課の事務を取り調べよとの命令を受け、わが名をあげるのもわが家を興すのも、今だと思っただけ、五十歳を越えた母に別れるのもさほど悲しいとは思わず、はるばると家を離れてベルリンの都に來た。

私は功名へのさだかならぬ願いと、困難に立ち向かう力とを身につけて、今まさに、このヨーロッパの新しい大都會の中央に立ったのである。なんと美しく輝く光か、わが目を射ようとするのは。なんとあてやかな色どりか、わが心を迷わそうとするのは。「菩提樹の下」と訳してみると、ひっそりと静かな所だろうと思われるが、この大街道が髪のようにまっすぐに伸びるウンターデン―リンデンに來て、道の両側の石畳の歩道を歩く幾組もの紳士淑女を見よ。まだウィルヘルム一世が在世中で街に面した窓によ

りそつておられる頃で、胸を張り肩をそびやかした士官がさまざまの色に飾りたてた礼装を着た姿、美しい顔の少女がパリ風によそおっている姿、そのどれもこれも目を驚かさないものはないのに、車道のアスファルトの上を音も立てず走るいろいろな馬車、雲にそびえるばかりの高い建物が少し途切れた所には、晴れた空に夕立の音を聞かせてみながら落ちる噴水の水、遠く眺めるとブランデンブルク門を隔てた向こうに緑の樹々が枝を交わした間から、中空に浮かび出た凱旋塔の神女の像、これら多くの光景が間近に集まっているので、初めてこのベルリンに来た者が、どれを見ていいか目移りするのも当然である。しかし私の心の中では、たとえどんな所に出かけていても、上べの美しさに心を動かすまいという誓いがある、常に私を襲う周囲の物事をさえぎりとどめていた。

私が呼鈴の綱を引き鳴らして取り次ぎを頼み、官庁の紹介状を出して東から来た旨を告げたプロシアの官吏は、みな快く私を迎え、公使館からの手続きさえ無事に済んだならば、どんなことでも、教えもし伝えもしようと約束した。喜ばしいことは、わが日本で、ドイツ語、フランス語を学んだことである。彼らははじめて私と会った時、どこでいつの間に、そんなに学べたのかと問わないことはなかった。

さて、官庁の仕事の暇のある度に、前もって役所の許可を得ていたので、現地の大学に入って政治学を修めようと、自分の名を大学の書類に記させた。

ひと月ふた月と過ごすうちに、公用の打ち合わせも済んで、取り調べの仕事も次第にはかどつてゆくので、急ぐことは報告書に作つて送り、そうでないものは写しておいてしまいいは何冊になっただろうか。大学の方は、幼稚な考えで思つたようには、政治家になるための特別の学科があるはずもなく、これかあれかと迷いながらも、二、三の法学者の講義の席に出ることに決めて、受講料を納め、行つて聴いた。

こうして三年程は夢のようにたつたが、時期が来れば包んでも包みきれないのは人間の好尚だろう。私は父の遺言を守り、母の教えに従い、他人が神童などと褒めるのが嬉しくて怠けずに勉強していた頃から、上司がよい働き手を得たと励ますのが嬉しくてたゆみなく勤めた時まで、ただ受け身の、器械的人物になつていたのを自分では気づかなかつたが、今二十五歳になつて、もう長くこの大学の自由な雰囲気に触れたからだろうか、心の中がなんとなく穏やかでなく、奥深く隠れていた本当の自分が、次第に表に現れてきて、昨日までの私ではない私を責めるかのようなのである。私は、自分が、現代に勢いよく活動する政治家になるのにも向いておらず、だからといって法律を丸暗記して裁判をする法律家になるのもふさわしくないと悟つた、と思つた。

私が心の内で思うには、私の母は私を生きた辞書としようとし、私の上司は私を生きた法律にしようとしたのではなかつたか。「生き字引き」であるのはまだ我慢できるが、「歩く六法全書」であるのは耐えられない。今まではささいな問題にも、きわめて丁寧な返事をしていた私が、こう考えた頃から上司にあてた手紙では、しきりに、法律・制度の細目にこだわるべきでないことを論じて、一旦法の精神さえ会得したならば、すべてのささいな事は竹を割るように簡単に片付くだらうなどと大きな口をきいた。また大学では、法科の講義をそつちのけにして、歴史・文学に心を寄せ、次第にそのおもしろみに分かるようになった。

上司は元々、自分の意のままに使える器械ロボットを作ろうとしたはずである。一人立ちした考えを抱いて、ふつうと違う面構えをした男をどうして喜ぶだろうか。危ないのは私の当時の地位だったのだ。しかしそれだけでは、まだ私の地位を覆すのに十分でなかつたのだが、常日頃から、ベルリンの留学生のうちで有力なある集団グループと私との間に、おもしろくない関係があつて、その人々は私を嫉み疑い、またとうとう私を罪なくしてそしるに至つた。しかしこれとても、理由なくしたことでなかつたろう。

その人々は私が彼らと一緒にビールのジョッキもあげず、ピリアードのキュウも取らないのを、私のかたくなな心と欲を抑える力のせいにして、一方ではばかにし、他方では嫉んだのだろう。しかし、それは私という人間を知らないからである。ああ、この理由は、自分でさえ気付かなかつたのだから、どうして他人に分かるはずがあるだろうか。私

の心はあの合歡ねむという木の葉に似て、物が触れば縮んで避けようとする。私の心は処女に似ている。私が幼い頃から目上の人の教えを守って、学びの道をたどったのも、役所勤めの道を歩んだのも、みな雄々しい気力があってできたのではない。耐え忍び困難に立ち向かう力と見えたのも、みな自分を欺き、人まで欺いていたことで、他人が私にたどらせた道を、ただひたすらたどっただけである。ほかのことに心が散らなかつたのは、周囲の物事を捨てて気にかけない気力があつたからではなく、ただ周囲の物事を恐れて、自分で自分の手足を縛っていただけである。故郷を出発するにあたつても、自分が有能な人物であることを疑わず、また自分の心が辛抱強いことも深く信じていた。ああ、それも一時のこと。船が横浜を離れるまでは、あっぱれ胆の坐つた人物と思つていた自分なのに、こらえきれない涙でハンカチを濡らしたのを自分でもおかしいと思つたが、これこそむしろ私の本来の性質だつたのだ。この心は生まれついでのものだつたらうか。あるいは、早く父を失つて母の手で育てられたことで生じたのだらうか。

その人々が私をばかにしたのはもつともなことである。しかし嫉んだのは的はずれではなかつたか、この弱くかわいそうな私の心を。

赤く白く顔を化粧して、はでな色の衣服をまとい、カフェに座つて客を引く女を見ては、近づいて彼女と付き合う勇氣がなく、高い帽子をかぶり、鼻眼鏡をかけて、プロシアでは貴族めいている鼻音で話す道楽者レイベマンを見ては、近づいて彼と遊ぶ勇氣がない。こうした勇氣がないから、あの活発な同郷の人々と交際するすべもない。このように交際がうといのがもとで、あの人々はただ私をばかにし、私を嫉んだだけでなく、私をそねみ疑うことになつた。これこそが、私が無実の罪を身に受けて、わずかの間に、はかり知れぬ苦しみを味わうきっかけであつた。

ある日の夕暮れだつたが、私はティーアガルテンをぶらぶら歩いて、ウンターーデンーリンデンを過ぎ、モンビシュウ街の自分の下宿に帰ろうとして、クロスター街の古い教会の前に来た。私はあの一面の街の灯の海を通り抜けて、この狭く薄暗い通りに入り、建物の手すりに干した敷布・肌着などをまだ取り入れてない人家、頬髭の長いユダヤ教徒の老人が戸口にたたずんでいる居酒屋、ある階段はそのまま上の階につながり、他の階段は地階住まいの鍛冶屋に通じている貸家アパートなどに向きあつて、凹字形に引き込んで建てられた、この三百年前の遺跡を見るたびに、我を忘れて暫くたたずんだことが、何回あつたか知れない。

ちやうど、この場所を通り過ぎようとする時、錠を鎖した寺の門扉によりかかつて、声を抑えて泣く一人の少女がいるのを見た。年は十六、七だろう。かぶつた布からあふれ出た髪の色は薄いブロンドで、着ている服は垢じみ汚れているようでもない。私の足音に驚いてふり向いた顔、私に詩人の筆の力がないのでその美しさを描きとめることはできない。この青く美しく、半ば涙を宿した長いまつげにおおわれてなにか言いたげに憂いをこめたまなざしは、ちらとこちらを見ただけで、どうして用心深い私の心の底まで貫いてしまったのだらうか。

彼女は、思いがけない深い悲しみに出会つて、あとさきを考える余裕もなく、ここに立つて泣いているのだらうか。私の臆病な心は、不憫と思う情に負けて、私は思わず側に寄り、「どうして泣いているのですか。この地に関係のないよそ者は、かえつて力を貸しやすいこともあるでしょう。」と話しかけたが、我ながら自分の大胆なのに呆れた。彼女は驚いて私の黄色い顔を見つめていたが、私のまじめな気持ちと表情に表れていたのだらう。「あなたはいい人のようです。彼のようにむごくはないでしょう。また私の母のように。」暫く乾いていた涙の泉はまたあふれて、愛らしい頬を流れ落ちた。

「私を助けてください、あなた。私が恥知らずの人間となるのを。母は、私が彼の言ひなりにならないからといって、私を打ちました。父は死にました。明日は葬式を出さなくてはならないのに、家に一銭の貯えさえないのです。」

あとはずすり泣きの声だけだつた。私の目は、このうつむいた少女の震える首すじにだけ注がれていた。

「あなたの家に送つてゆくから、まず落ち着きなさい。泣き声を人に聞かせてはいけ

ません。ここは往来だから。」彼女は話をするうちに、思わず私の肩によりそったが、この時ふと頭をあげ、そして初めて私を見たかのように、恥ずかしがって私の側を飛びのいた。

人が見るのが嫌で、足早に歩く少女のあとについて、教会の筋向かいの大きな門扉を入ると、ところどころ欠けた石の階段がある。それを上った五階に、腰を曲げて潜る程のドアがある。少女は、さびた針金の先をねじ曲げたのに手をかけて強く引くと、中ではしわがれた老婆の声で、「誰なの。」ときく。エリスが帰った、と答えるとすぐ、ドアを荒々しく引き開けたのは、半ば白くなった髪、悪い顔つきではないが貧苦のあとを額に刻んだ老婆で、古いラシャの服を着、汚れた上靴を履いている。エリスが私に会釈して中に入るのを待ちかねたように、彼女はドアを激しく閉めてしまった。

私はしばらく呆然として立っていたが、ふとランプの光でドアをよく見ると、エルンスト・ワイゲルトと漆で書き、下に仕立物師と書き添えてある。これは死んでしまったという少女の父の名前だろう。中では言い争うような声が聞こえたが、また静かになってドアが再び開いた。さっきの老婆は丁寧に自分が無礼な振る舞いをしたことを詫びて私を迎え入れた。ドアの内側は台所で、右手の低い窓に、まっ白に洗った麻布を掛けてある。左手には粗末に積み上げた煉瓦のかまどがある。正面の一室のドアは半分開いているが、その中には白い布を覆ったベッドがある。横たわっているのは死んだ人である。かまどの側のドアを開けて、エリスは私を導いた。そこはいわゆる屋根裏部屋^{マンサールド}の街路に面した一室なので、天井もない。隅の屋根裏から窓に向かって斜めに下がる梁を紙で張った下に立つと頭のつかえそうな所にベッドがある。中央の机には美しい布を掛けて、上には本を一、二冊とアルバムを並べ、陶器の花瓶にはここに似つかわしくない高価な花束が生けてある。その側に少女は恥じらいを含んで立った。

彼女は抜きんでて美しい。乳のような白い顔は、ランプの火に映えて薄紅を帯びている。手足のか細くしなやかで美しいのは、貧しい家の女のようではない。老婆が部屋を出たあとで、少女は少し訛のある言葉で言った。「許してください。あなたをここまでお連れした分別のなさを。あなたはいいい人のようです。私をまさかお憎みにならないでしよう。明日に迫った父の葬式、頼りにしたシャウムベルヒ、あなたは彼を知らないでしょう。彼はヴィクトリア座の座長です。彼の座員となってから、もう二年たつので、わけなく私たちを助けるだろうと思っただのに、人の嘆きにつけこんで、勝手な言い掛かりをつけようとは……。私を救ってください。あなた。お金は安い給料をさいてお返しします。かりに自分は食べなくても。それもだめなら母の言うままに……。」彼女は涙ぐんで身を震わせている。その見上げた目には、人に否と言わせないなまめかしさがある。この目の働きは知ってしているのだろうか、それとも知らないでだろうか。

私のポケットには、二、三マルクの銀貨があったが、それで足りるはずもないので、私は時計を外して机の上に置いた。「これで一時の急場をしのぎなさい。質屋の使いがモンビシウ街三番地で太田と尋ねて来た時に、代金を払うから。」

少女は驚き感動した様子で、私が別れのために出した手に唇を当てたが、はらはらと落ちる熱い涙を私の手の甲に注いだ。

ああ、なんとという悪い原因となったか。この恩に礼を言おうとして、自分から私の下宿に来た少女は、ショーペンハウアーを右に、シラーを左にして、一日じつと座って読書する私の窓辺に、一輪の名花を咲かせてしまった。この時を初めとして、私と少女との交際は次第にたび重なつていき、日本人にまで知られたので、彼らは早合点にも、私のことを踊り子の間に色を漁る者だとした。私たち二人の間には、まだ無邪気な喜びだけがあったのに。

その名をあげるのは差し障りがあるが、日本人の中にもめ事を好む人がいて、私がたびたび劇場に出入りして、女優と交際しているということを、上司のもとに報告した。そうでなくてさえ私がいそがしく学問の脇道に走るのを知って憎く思っていた上司は、ついにその意向を公使館に伝えて、私の官を免じ、職を解いた。公使がこの命令を伝える時、私に、もしあなたがすぐ日本に帰るならば、旅費を支給できるが、もしまだここに留まるならば、公的な援助を仰ぐことはできない、と言った。私は一週間の猶予を願っ

て、あれこれと思い悩んでいる間に、私の生涯でいちばん悲しく辛い思いをした二通の手紙を受け取った。この二通はほとんど同時に出したものだ、一つは母の自筆の手紙で、もう一つは親族のある人が、母の死を、私がこの上なく慕う母の死を知らせる手紙だった。私は母の手紙の言葉をここに繰り返すのに堪えられない。涙がこみあげてきて、筆の動きを妨げるからである。

私とエリスとの交際は、この時までには、はた目に見るより清らかだった。彼女は父が貧しいために、十分な教育を受けず、十五の時踊りの先生の募集に応じて、この恥ずかしい仕事を教えられ、講習が終わってから、ヴィクトリア座に出演し、今では劇団第二の地位を占めている。しかし詩人ハックレンダーが「現代の奴隷」と言ったように、心細いのは踊り子の身の上である。安い給料で縛られ、昼の稽古リハサル、夜の舞台と厳しく使われ、劇場の楽屋に入ればこそ紅ベニ、お白粉しろいもつけ、美しい衣装もまとうけれども、劇場の外では自分ひとりの衣食もままならないから、親兄弟を養う者はその苦勞はどんなであるうか。だから、彼女たちの仲間で、いちばん卑しい仕事に堕ちない者は稀だという。エリスがそうならなかったのは、彼女の分別ある性質と強い気性の父の守護によってである。彼女は幼い時から本を読むことを好んだといっても、やはり手にするのは卑しい行商人コボルトという貸本屋の小説だけであつたのを、私と知り合つた頃から、私が貸した本を読み慣れて、次第によい趣味も身につけ、言葉の訛も正し、間もなく私に送ってくる手紙にも誤字が少なくなつた。だから我々二人の間には、まず師弟の交わりが生じたのだつた。私の不意の免官を聞いた時、彼女は驚き青ざめた。私は、彼女がこの件に関わつていたことを包み隠していたが、彼女は私に向かつて、母にはそれを内緒にしてくださいと言つた。それは、私が学費を失つたことを知つて、私を遠ざけるのを恐れたからである。

ああ、詳しくここに記すのも無意味なことだが、私が彼女を愛する心が急に強くなつて、ついに離れたい仲となつたのはこの時だつた。自分の一身上の大事に直面し、まぎれもなくどうなるかの瀬戸際の時期なのに、こうした行動のあつたことをいぶかしく思い、また非難する人もあるだろうが、私がエリスを愛する気持ちは、初めて会つた時から浅くはなかつた上に、今私の不運を哀れみ、また別れを悲しんでうつつむいた顔に耳もとの毛が解けてかかつた、その美しい、いじらしい姿は、悲しみと嘆きに取り乱した私の脳髓を射て、我を忘れていた間にそうなつてしまつたのをどうしたらいいか。

公使に約束した日も近づき、自分の運命は追いつめられた。このままで故郷に帰つたならば、学問も成し遂げずに免官の汚名を負つた自分が立ち直る機会はあるまい。だからといつてこの地に留まらうにも、学費を得られる手段がない。

この時私を助けたのは、今私と同行の一人の相沢謙吉である。彼は東京にいてすでに天方伯爵の秘書官だったが、私の免官が官報に出たのを見て、ある新聞社の編集長を説きふせ、私を新聞社の通信員とし、ベルリンに残つて政治・学芸の事などを報道させることにした。

新聞社の報酬は言う程のこともないが、住まいを移し、昼食に行く食堂を変えたならばささやかな暮らしはできるだろう。こうあれこれ思案するうちに、誠意を示して助けの綱を私に投げ掛けたのはエリスだつた。彼女はどのように母を説得したか、私は彼女ら親子の家に身を寄せることとなり、エリスと私とはいつからとはなく、あるかないかの乏しい収入を合わせて、辛いなかにも楽しい月日を送るようになった。

朝のコーヒーが済むと彼女は稽古リハサルに行き、そうでない日は家において、私はケーニツヒ街の間口が狭く奥行きばかりたいそう長い店に行き、あらゆる新聞を読み、鉛筆を取り出してあれこれと記事の材料を集める。切り開いた引き窓から光をとるこの部屋で、定職のない青年、多くもない金を人に貸して自分は遊び暮らす老人、取引所の仕事の暇を盗んで足を休める商人などと肩を並べ、冷たい石のテーブルの上で、忙しそうに筆を走らせ、ウエイトレスが持つてきた一杯のコーヒーが冷めるのも気にせず、細長い板切れに挟んだ新聞で空いたのを何種類となく掛け並べた片方の壁に、何度となく行き来する日本人を、知らない人はなんと見ただろうか。そして一時近くなる頃に、稽古に行つ

た日は帰り道に立ち寄って、私とともに店を出てゆく、このたいそう身のこなしの軽い掌上の舞でもできそうな少女を、いぶかしく見送る人もいたことだろう。

私の学問はすさんだ。屋根裏部屋のランプがかすかに燃えて、エリスが劇場から帰って、椅子に座って縫い物などをしている側の机で、私は新聞の原稿を書いた。以前、法令条目の枯れ葉を紙に寄せ集めて書いたのとは違い、今は、活気ある政界の動き、文学・美術に関する新現象の批評など、あれこれと結び合わせて、ベルネよりはむしろハイネを学んで構想をねり、力を尽くしてさまざまの文章を書いた中でも、続けさまにウイルヘルム一世とフリードリッヒ三世の逝去があつて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退はどうかなどのことについては、とりわけ詳しい報告をした。だから、この頃から思つていたよりも忙しくて、多くもない蔵書を開いて読むことも、以前の学業をさぐることも難しく、大学の籍はまだ削られていないが、授業料を納めることが難しいので、ただ一つにした講義さえ行つて聴くことは稀だつた。

私の学問はすさんだ。しかし、私はそれとは別に一種の見識を育てあげた。それはなにかといえ、およそ民間に学問が広く普及している点でヨーロッパ諸国のなかでドイツに優つた国はないだろう。幾百種の新新聞・雑誌に見受ける議論の中にはたいそう高尚なものも多いのを、私は通信員となつた日から、かつて大学に足繁く通つた時に養ひえた独自の見識で、読んではまだ読み、写してはまた写すうちに、今まで一つの狭い道だけを進んできた知識は、当然総括的になつて、日本の留学生などのほとんどが想像もできない境地に至つた。彼らのなかには、ドイツ語の新聞の社説さえ満足に読めない者がいるけれど。

明治二十一年の冬は来たのだつた。目抜き通りの歩道でこそ砂をまいたり鋤で雪や氷を除いたりするけれど、クロステル街のあたりは、凸凹して歩きづらい所が見えるようだが、表面は一面に凍つて、朝ドアを開けると飢え凍えた雀が落ちて死んでいるのも哀れである。部屋を暖め、かまどに火を焚きつけても、壁の石をしみ通り、服の綿を突き抜ける北ヨーロッパの寒さは、なまじのことでは堪えがたかつた。エリスは、二、三日前の夜、舞台で倒れたといつて、人に支えられて帰つて来たが、それから気持ちが悪いといつて休み、何か食べるたびに吐くのを、悪阻というものだろうと最初に気づいたのは母だつた。ああ、そうでなくてさえ見通しの暗い自分の将来なのに、もし事実だつたらどうしたらいいだろう。

今朝は日曜なので家にいたが、心は楽しくない。エリスはベッドに横になる程ではないが、小さな鉄のストーブの側に椅子を寄せて座り、言葉少なである。この時戸口で人の声がして、間もなく、台所にいたエリスの母は郵便の手紙を持って来て私に渡した。見ると見覚えのある相沢の筆跡なのに、郵便切手はロシアのもので、消印にはベルリンとある。不思議に思いながらも開いて読むと、急なことで前もって知らせる方法がなかつたが、昨夜当地に到着された天方大臣について、自分も来た。天方伯爵が君に会いたいとおっしゃるから、早く来い。君の名譽を回復するのも今この時にかかつている。気持ちが悪くので用件だけ伝える、とあつた。読み終わつて呆然としている顔つきを見て、エリスが言った。「故郷からの手紙ですか。まさか悪い知らせではないでしょうね。」彼女は、例の新聞社の報酬に関する手紙と思つたのだろう。「いや、心配しない方がいい。あなたも名を知っている相沢が、大臣と一緒にここに来て私を呼んでいるのだ。急ぐと言うから今からでも。」

可愛いひとりっ子を送り出す母親も、これ程は気を使うまい。大臣に会いもしようと思うのだろうか、エリスは病氣をおして起き、ワイシャツも特に白いのを選び、丁寧にしまつてあつたゲエロツクという二列ボタンの服を出して着せ、ネクタイまで私のために彼女が結んでくれた。

「これで見苦しいとは誰も言えないでしょう。私の鏡に向かつて見てごらん下さい。どうしてそんな詰まらなそうな顔をなさるのでですか。私も一緒に行きたいけれど。」少し改まった様子で、「あらどうして。こう改まった服装を見ると、なんだか私の豊太郎さんには見えません。」そして少し考えて、「たとえ富貴におなりの日はあつても、私をお見捨てにならないでしょうね。私の病氣が母のおっしゃるようなものでないとして

も。」

「なに、富貴。」私は微笑んだ。「政治の世界に出ようという望みを絶つてから、何年もたってしまったのに。大臣は見たくもない。ただ長い間別れていた友人に会いに行くだけだ。」エリスの母が呼んだ一等馬車は、車輪の下できしむ雪道を窓の下まできた。私は手袋をはめ、少し汚れたコートをおおって手は通さず、帽子を取ってエリスにキスして建物を下りた。彼女は凍った窓を開け、乱れた髪を北風になびかせて、私の乗った馬車を見送った。

私が馬車を降りたのは、カイゼルホーフの入口だった。門衛に秘書官相沢の部屋の番号を聞いて、長らく踏むことのなかった大理石の階段を登り、中央の柱にビロードのソファを置き、正面に鏡をはめたロビーに入った。コートをここで脱ぎ、廊下を通って部屋の前まで行ったものの、私は少しためらった。共に大学にいた頃、私の身もちが正しかったのを褒めたたえた相沢が、今日はどんな表情で出迎えるのだろうか。部屋に入ると向かい合ってみると、体格こそ昔に比べて肥って逞しくなっているが、もとのままの元気で明るい気立てで、私の過失をさほど気に留めていない様子だった。別れてからの事情を詳しく言う暇もなく、導かれて大臣にお目にかかり、そこで頼まれたのはドイツ語で書かれた文書で急を要するものを翻訳せよ、ということだった。私が文書を受け取って大臣の部屋を出た時、相沢は後ろから来て、私と昼食を一緒にしようと言った。

食卓では彼が多くを尋ね、私が多くを答えた。彼の人生はほぼ順調だったのに比べ、不運不遇だったのは私の身の上だったからである。

私が胸のうちを開いて話した不幸な経過を聞いて、彼はたびたび驚いていたが、むしろ私を責めようとはせず、かえって他の平凡な留学生連中を罵った。しかし、私の話が終わった時、彼は改まった態度で私を諫めるには、この一件は、もともと生まれながらの弱い性格から生じたことなので、いまさら言っても仕方がない。そうは言っても、学識があり、才能がある者が、いつまでも一少女の愛情にとらわれて、目的のない生活をしていいものだろうか。今のところ、天方伯爵もただ君のドイツ語を利用しようという気持ちだけだ。私もまた、伯爵が、当時の君の免官の理由を知っているから、むりにその先入観を変えようとはしない。伯爵の心の中で、事実を曲げてまで庇う者だなどと思われては、友人にも利益がなく、自分にも損だからである。人を推薦するには、まずその能力を示すのに越したことはない。それを示して、伯爵の信用を手に入れよ。一方その少女との関係は、たとえ彼女に誠意があったとしても、たとえ関係が深くなってしまうとしても、人柄を知った上での恋ではない。慣習という一種の惰性から生じた交わりである。決心して関係を断て。以上が彼の話のあらましであった。

大海原で舵を失った船乗りが、遠くの山を望むようなものが、相沢が私に示した今後の方針だった。しかしその山はまだ深い霧の中にあつて、いつ行き着くのかも、いや、行き着いても果たして私の心に満足を与えるかどうかもはっきりしない。貧しい中にも楽しいのは今の生活、捨て難いのはエリスの愛。私の弱い心では決断するすべもなかったが、この場合はひとまず友人の言葉に従って、関係を断とうと約束した。私は自分の守るものを失うまいと思つて、自分に刃向かう者には抵抗するが、友人に対しては嫌と答えられないのがいつものことだった。

別れて外に出ると、風が顔を打った。二重のガラス窓をきちんと錠で鎖して、大きな陶製の暖炉に火を焚いているホテルの食堂を出たので、薄いコートをしみ通る午後四時の寒さはとりわけ耐え難く、肌が粟立つとともに、私は心の中に一種の寒けを感じた。

翻訳は一晚でなしおえた。カイゼルホーフに通うことが、その後次第にたび重なるにつれて、初めは伯爵の言葉も用件だけだったが、後には、最近日本であった話題を引いて私の意見を聞き、時には、旅の途中で人々の失敗があつたことなど話しては笑われた。ひと月程たつて、ある日、伯爵は突然私に向かつて、「私は明日朝、ロシアに向かつて出発するつもりだ。ついて来られるか。」と聞く。私は数日間の間、公務に忙しいあの相沢に会っていなかったもので、この問いはだしぬけに私を驚かした。「どうしてご指示に従わないことがありますか。」私は、自分の恥を打ち明けよう。この答えは、素早く決断して言つたのではない。私は、自分が信じ頼る気持ちを抱いた人に、突然な

にか聞かれた時は、とつさに、その答えの内容もろくに考えず、すぐに承知することがある。そして承知したあとで、実行するのが難しいのに気づいても、何も考えずに答えたことをむりに隠し、我慢して実行することがたびたびだった。

この日は翻訳料に、旅費まで添えてくださったのを持って帰り、翻訳料はエリスに預けた。これで、ロシアから帰ってくるまでの出費はまかなえるだろう。彼女は医者に見せたところふつうの身体ではないという。貧血の傾向があったので、何か月か気づかなかったのだろう。ヴィクトリア座の座長からは、休むのがあまりに長いので解雇したと言つてよこした。まだひと月程なのにこう厳しいには訳があるからだろう。エリスは、ロシアへの出発についてあまり心を悩ませているとも見えない。偽りのない私の心を深く信じているので。

鉄道では遠くもない旅なので、準備など特にない。背丈に合わせて借りた黒い礼服、新しく買い求めたゴタ版のロシア宮廷の貴族名簿、二、三種類の辞書などを、小さいカバンに入れただけである。とはいっても心の細かいことばかり多いこの頃なので、出かけて行ったあとに残る者もつらからうし、また駅で涙を流したりしては私も気掛かりだろうというので、翌朝早くエリスを母と一緒に知人の家に送り出してやった。それから私は旅支度を整えてドアに鍵をかけ、鍵を入りに口に住む靴屋の主人に預けて出かけた。

ロシア行きについて、格別書くべきことはない。通訳である私の任務は、そのまま私をベルリンから連れ去り、ロシア宮廷に置いた。私が大臣の一行について、ペエテルブルクにいた間に私を取り巻いたのは、パリ最高の贅沢を氷雪の土地に移した王城の飾りつけ、ことさら黄蠟の燭台を数多く灯した上に、たくさんエボレストの勳章や肩章が反射する光、

彫金の技巧をこらした暖炉カミンの火に寒さを忘れて使う貴婦人の扇の閃きなどで、この間、フランス語をもっとも流暢リョウチャウに使うのは私だったから、客と主人の間をとりもつて話を伝える者も、また多くは私だった。

この間、私はエリスを忘れなかった。いや、彼女が毎日手紙を寄こしたので忘れることができなかったのだ。私がベルリンを立った日は、いつになくひとりでランプに向きあうことがつらくて、知人の所で夜になるまで話しこみ、疲れるのを待って家に帰り、そのまま寝てしまった。次の朝目覚めた時、ひとりだけ後に残ったことが夢ではないかと思つた。起きた時の心細さ、こんな思いは、生活に困つてその日の食べ物が無かつた時にもしなかつた。以上が、彼女の第一の手紙のあらましである。

そして、少したつてからの手紙はひどく思い詰めて書いたようだった。手紙を、「いいえ」という語で始めていた。いいえ、あなたを思う心の深さを今こそ知りました。あなたは日本に頼れる親戚がいとおっしゃっていたから、こちらで生活のいい手だてがあれば、留まってくださらないことは、ありはしませんね。そうでなくても、私の愛で繋ぎ留めないでおきましょうか。それもできなくて日本にお帰りになるのなら、私も親と一緒に行くのはたやすいけれど、あの高い旅費をどこから工面できましょう。どんな仕事をしても、この土地に留つてあなたが出世なさる日を待とうとこれまで思つていました。暫くの旅といつて出発なさつてからのこの二十日ほど、別れ別れのつらさは日ましに募るばかり。別れているのはほんの一時の苦しみだと思つていたのは、思い違いと気付きました。私の体がふつうでないことが次第に目立つようになったことでもあるのですから、どんなことがあつても、私を決して捨てないでください。母とはひどく言い争いました。しかし、私が昔とは違つて意志が固いのを見て折れました。私が日本に行く日がくれば、母はシュテツチン近くの農家に遠い縁者がいるので、そこに身を寄せようと言っています。あなたが手紙で書いていらつしやつたように、大臣に重く用いられていらつしやるなら、私の旅費はどうにでもなるでしょう。今はただ、あなたがベルリンにお帰りになる日を待つだけです。

ああ、私はこの手紙を見て、初めて自分の立場をはつきりと知りえた。恥ずかしいのは私の鈍い心である。私は、自分一人の進退についても、あるいは自分に関わりのない他人のことについても、決断力があると自負していたが、この決断力は順調な時にだけあつて、逆境にはなかつた。自分と人との関係を明らかにしようとする時は、頼りとす

る私の胸中の鏡は曇っていた。

大臣はすでに私を厚く信頼している。しかし私の近視眼は、ただ自分が果たした役目だけを見ていた。これに自分の将来の栄達の望みを繋ぐことには、神もご存じだろうが、まったく思いもよらなかったのだ。しかし、今この事態に気がついて、それでも私の心は冷静でいられようか。以前友人が勧めてくれた時は、大臣の信用は屋根の上の鳥のように手の届かないものだったが、今は少しだけそれを得たかと思えるのだが、相沢のこの頃の言葉の端に、日本に帰った後も一緒にこうであればなどと言ったのは、大臣がそうおっしゃったのを、友とはいえ公的な事なのではつきりとは言わなかったのか。今になって思えば、私が軽率にも彼に向かつて、エリスとの関係を絶とうと言ったのを、すでに大臣に告げたのだろうか。

ああ、ドイツに來た初めに、自分で自分の本質を悟ったと思って、もう二度と器械的人物とはなるまいと誓ったが、これは足に糸をつけて放たれた鳥が、少しの間羽を動かして自由を得たと誇っていただけではないか。足の糸を解く方法はない。以前糸を操っていたのはわが某省の上司で、今はこの糸は、ああんということか、天方伯爵の手の中にある。私が大の一行とともにベルリンに帰ったのは、ちょうど元日の朝であった。駅に別れを告げて、わが家を目ざして、馬車を走らせた。ここでは今も除夜には眠らずに、元旦に眠るのが習慣なので、どの家もひっそりとしている。寒さは厳しく、道の雪は角ばった氷片となって、晴れた日の光を反射して、きらきらと輝いている。馬車はクロステル街に曲がって、家の入口に止まった。この時窓を開く音がしたが、馬車からは見えない。馭者にカバンを持たせて階段を登ろうとする時、エリスが階段を駆け降りてくるのに会った。エリスが一声叫んで私の首を抱いたのを見て、馭者は呆れた顔つきで何か髭の中で言ったが聞こえない。「ようこそ帰っていらっしやいました。もし帰っていらっしやらなければ私は死んでしまったでしょう。」

私の心はこの時になってもまだ決まっておらず、故郷を思う気持ちと出世を求める心は、時には愛情を抑えつけようとしたが、ただこの一瞬に、ためらい悩む思いは去って、私は彼女を抱き、彼女の頭は私の肩に寄りかかり、彼女の喜びの涙ははらはらと肩に落ちた。

「何階に持って行けばいいんですか。」と鑼のように叫んだ馭者は、すでに家へ上がつて階段の途中に立っている。

ドアの外に出迎えたエリスの母に、馭者をねぎらってください、と銀貨を渡し、私を手をとって引くエリスについて、急いで部屋に入った。ちらっと見て私は驚いた。机の上には白い木綿、白いレースなどがうす高く積み上げてあったので。

エリスは微笑みながらそれを指さして、「ご覧になってどう思いますか、この用意を。」と言いなながら一つの木綿ぎれを取り上げるのを見るとおむつだった。「私の心の楽しさをわかってください。生まれてくる子はあなたに似て黒い瞳をしています。」

この瞳。ああ、夢にまで見たのはあなたの黒い瞳でした。生まれた日には、あなたの正しい心で、まさか別の姓を名乗らせはしないでしよう。「彼女は頭を伏せた。「幼いとお笑いかもしれないけど、教会に行く日はどんなにか嬉しいでしょう。」見上げる目には、涙が溢れている。」

二、三日の間は、大臣も旅の疲れがおりかた、あえて訪れず、家にばかりこもっていたが、ある日の夕方、使いが来て招かれた。行ってみると待遇がとりわけすばらしく、ロシア行きの労をねぎらったあと、私とともに日本に帰る気持ちはないか、君の学問は私の理解できないところだが、語学だけで充分世の中の役に立つだろう。滞在があまりに長くなったので、いろいろと面倒な関係もあるだろうと相沢に尋ねたところ、そんなことはない聞いて安心した、とおっしゃる。その様子は断われそうにないものがあった。ああどうしようかと思つたが、そうはいつでも相沢の言葉を嘘だとも言いにくい上に、もしこの手にでもすがらなければ、祖国も失い、名誉を挽回する方法もなく、わが身はこの果てしなく広いヨーロッパの大会の人の海に葬られてしまうのかと思う心配が、突然心の中に起こった。ああ、まるで節操のない心ではないか、「承知しました。」と答えたのは。

鉄面皮であったとしても、帰ってエリスに何と言ったものか。ホテルを出た時の私の心の取り乱し方は、たとえようもなかった。私は道の東西も分からず、思いに沈んで歩くうちに、行き交う馬車の馭者に何度も怒鳴られ、驚いて飛びのいた。暫くしてふと辺りを見ると、ティーアガルテンの脇に出ている。倒れるように道ばたのベンチに寄りかかって、焼けるように熱く、槌で打たれるようにうづく頭をベンチの背にもたせかけ、死んだようになって何時間過ごしたのだろうか。激しい寒さが骨にしみ通ると感じて目覚めた時は、夜になっていて雪はしきりに降り、帽子の庇、コートの肩に一寸ほども積もっていた。

すでに十一時を過ぎていたろうか、モアビット、カール街へ通ずる鉄道馬車のレールも雪に埋もれ、ブランデンブルク門のそばのガス灯は寂しい光を放っていた。立ち上がろうとすると足が凍えているので、両手でさすって、どうにか歩けるようにはなった。足の運びが思うにまかせないので、クロステル街まで来た時は、真夜中を過ぎていただろう。ここまで来た道をどのように歩いたか記憶にない。一月上旬の夜なのに、ウンター・デーリンデンの酒場、カフェはまだ人の出入りが盛んで、賑やかだったろうが、まったく覚えていない。私の頭の中は、ただただ、自分は許すことのできない罪人だと思ふ気持ちだけで一杯だった。

五階の屋根裏部屋では、エリスがまだ寝ていないと思われて、きらめく一つの灯火が、暗い夜空に浮き出すようにはつきり見えるのが、降りしきる驚のような白い雪片に、すぐ覆われ、またすぐ現れて、風にもてあそばされるようであった。門扉を入ると同時に疲れを感じ、体の節々の痛みが堪えきれないので這うように階段を登った。台所を抜けて部屋のドアを開けて入ると、机に向かっておむつを縫っていたエリスは振り返って「あつ。」と叫んだ。「どうなさったのですか。あなたのその格好は。」

驚いたのも無理はない。青ざめて死人同然の私の顔色、帽子をいつの間にか失い、髪はばさばさに乱れて、何度も道でつまずき倒れたので、服は泥まじりの雪に汚れ、所々破れていたのだから。

私は答えようとしたが声が出ない。膝がしきりに震えて立ってられないので、椅子をつかもうとしたまでは覚えているが、そのまま床に倒れてしまった。

私の意識が戻ったのは、数週間の後だった。熱がひどくうわ言ばかり言っていたのを、エリスが心をこめて看病するうちに、ある日相沢が尋ねてきて、私が彼に隠していた事のいきさつをすっかり知って、大臣には病氣のことだけ伝え、いのように言い繕っておいたのである。私は病床に付き添っているエリスに気付いて、その変わり果てた姿に驚いた。彼女はこの数週間のうちにひどく痩せて、血走った目はくぼみ、灰色の頬は痩せこけていた。相沢の助けで毎日の生活には困らなかつたものの、この恩人は彼女を精神的に殺したのである。

後で聞くと、彼女が相沢に会った時、私が相沢に与えた約束を聞き、またあの夕方に大臣に申し上げた承諾を知って、突然椅子から飛びあがり、顔色はまるで土のようで、「私の豊太郎さんは、こうまで私をだましていらしたのか。」と叫び、その場に倒れてしまった。相沢は母を呼んで一緒に支えてベッドに横にしたが、暫くして意識が戻った時は、目はまっすぐ前を見るだけで、側の人も誰か分からず、私の名を呼んでひどく罵り、髪をかきむしり、布団を噛むなどし、あるいは急に正気に戻った様子でなにか探し求めた。母が取って与えた物はみな投げ捨てたが、机の上のおむつを与えた時は、手さぐりして顔に押しあて、涙を流して泣いた。

このあと騒ぐことはなかったが、精神の働きはほとんどすべてすたれて、その分別のないことは赤ん坊のようである。医者に見せたところ、過激な心労で急に起こった。パラノイアという病気なので、回復の見込みはないという。ダルドルフの精神病院に入れようとしたところ、泣き叫んで聞き入れず、そのあとは、あのおむつ一つを持って、何回も出しては見、見てはすすり泣く。私の病床を離れないが、それも自覚しての行動ではないと見受けられた。ただ時々思い出したように、「薬を。薬を。」と言うばかりである。

私の病気はすっかり治った。エリスの生きた屍を抱いて、何度千行の涙ちやしを流したことか。大臣に従って日本に帰る時、相沢と相談して、エリスの母につましい暮らしを送れ

る位のまとまった金を与え、哀れな正気を失った女の胎内に残した子が生まれる時のことを頼んでおいた。

ああ、相沢謙吉のような良い友は、またとないにちがいない。しかし、私の胸の中には、彼を憎む一点の想いが今でも残っているのである。